

# 平成28年度農業電化推進コンクール

## 受賞事例概要

( 農業電化協会会長賞 )

### 経営関連事例、ヒートポンプ以外の機器導入事例

#### ご注意

ここに記載の知的技術情報について、受賞者本人および当協会の許可なく複製・転載・引用することは、ご遠慮ください。

また、受賞者への直接のお問い合わせは、ご遠慮ください。

都道府県名	富山県	作物名	水稲、大麦、野菜（キャベツ、 短葉性ねぎ）
業績や技術の名称	ミニライスセンターと大区画ほ場の整備による効率的な農業の実践		
<p>* 立地条件：富山県魚津市の西部の海岸部に位置し、平坦な砂質地帯で、水稲を中心とした稲作単作地帯であるが、一方で花卉や施設園芸との複合経営も広く取組まれてきた。</p> <p>* 経営規模：作付面積 水稲 22.6ha、大麦 8.1ha、短葉性ねぎ・キャベツ 0.5ha</p> <p>* 導入実践の経緯：規模拡大や地区外農家からの刈取・乾燥調製等の依頼対応のため、平成 21 年度、遠赤外線乾燥機 1 台の増設とフレコン出荷用機械の整備を行い、さらに、平成 24 年には本格的な複合経営の確立を目指して、短葉性ねぎの調製機械類を導入した。</p> <p>* 電化設備概要：水稲乾燥機、水稲籾摺選別機、温湯消毒装置付き催芽器、水稲育苗器 等。</p> <p>* 導入技術の内容・経営の改善： 水稲育苗施設、乾燥調製施設、格納庫を一体的に整備し、効率的で合理的な農作業を実践している。特に乾燥調製施設は、一次貯留、籾殻保管庫、粉塵処理などを有したミニライスセンターであり、乾燥から調製までの一連の作業に加え、園芸品目の調製作業を行う作業場としても機能する拠点施設となっている。また、肥効調節型の基肥一発肥料やラジヘリ防除等の省力化技術を積極的に導入し、大区画ほ場のメリットを最大限に活かしている。</p>			
都道府県名	石川県	作物名	酪農
業績や技術の名称	酪農関連電化機器の導入による高品質生乳の安定生産と搾乳量増加の実現		
<p>* 立地条件：酪農関連電化機器の導入による高品質生乳の安定生産と搾乳量増加の実現</p> <p>* 経営規模：飼養頭数 ホルスタイン種経産牛 55 頭、未經産牛 2 頭、育成・子牛等 48 頭</p> <p>* 導入実践の経緯：安全・安心はもとより高品質生乳の安定生産と搾乳量増加の実現を目標に、酪農関連電化機器の導入を積極的に行い、省力化、経営の近代化・高度化を実践している。</p> <p>* 電化設備概要：パイプラインミルク、バルククーラー、自動給餌機、送風機 等。</p> <p>* 導入技術の内容・経営の改善： ・多機能の自動離脱ミルクによる適正な搾乳と自動給餌機での多回数給餌に加えて、自給飼料であるトウモロコシサイレージや稲ホールクロップサイレージの導入により、飼養管理技術が飛躍的に向上し、生乳生産量が 2 割程度増加している。 ・夏期における乳牛への暑さ対策として、12 機の送風機を稼働することで牛舎内温度を下げることができ、一般的に、1 割程度低下する夏期においても、乳量を維持している。更に送風機にインバーター機能を付加し、気温に合わせて風力を調整して省エネ化を行っている。</p>			

都道府県名	大阪府	作物名	野菜（トマト、キュウリ）
業績や技術の名称	農業電化技術を活用したトマト・きゅうりのれき耕栽培の実践		
<p>* 立地条件：茨木市の平坦部の都市化の進んだ地域にあり、施設周辺には住居が隣接している。</p> <p>* 作付面積：半促成トマト 2,310 m<sup>2</sup>、キュウリ 1,650 m<sup>2</sup>、抑制トマト 3,960 m<sup>2</sup>（鉄骨ガラス温室 1,320 m<sup>2</sup>×3棟）。</p> <p>* 導入実践の経緯：昭和57年、当時茨木市内では木造ハウスが主流だったが、鉄骨ハウスを新設。昭和62年、63年に木造ハウス2棟をそれぞれ鉄骨ハウスに建て替え、施設の高度化・省力化を図っている。</p> <p>* 電化設備の概要：細霧冷房、養液循環ポンプ、温風暖房機、自動換気天窓、自動カーテン 等。</p> <p>* 導入技術の内容・経営の改善：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 府内で先駆的にれき耕栽培に取り組み、pH、ECの測定と生育調査により、トマト、きゅうりにおける季節ごとの養液濃度管理や温度管理を把握し、高品質なトマト、きゅうりのれき耕栽培技術を確立した。</li> <li>・ トマト施設内における夏季高温対策として、8～9月は自動換気天窓と合わせて細霧冷房、自動カーテンを活用し、高品質なトマトを生産している。</li> <li>・ 養液に用いる原水の成分分析を実施し、これに合わせた単肥配合設計を行うことで、市販配合液肥を用いる一般的な栽培法に比べて、肥料コストが大幅に低減している。</li> </ul>			